

かしら石

第102号

日本キリスト教団
福岡女学院教会
牧師 三ツ本武仁
編集 広報委員会

『主がお入り用なのです』

「向二うの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばがつないであり、一緒に子ろばがいるのが見つかる。それをほどこいて、わたしのところへ引いてきなさい。」(マタイによる福音書 二二章 一〜二節)

協力牧師 青木 麻里子

マタイによる福音書 二二章 一〜二節では、イエスさまが子ろばに乗ってエルサレムに入られたことが記されています。当時、王も戦争以外の時にはろばに乗って都入りをしました。つまり、イエスさまは自ら平和の王として、エルサレムに入られたのです。

さて、イエスさまは使いに出された弟子たちに「主がお入り用なのです」という言葉を与えられました。ここでは、弟子たちへの指示の言葉が非常に明確なので、イエスさまご自身が入城のために準備をされていたのではないかと私には思えてなりません。なぜなら、十字架へと進んで行かれるイエスさまの確固たる覚悟が

読む側にはしっかりと伝わるからです。この場面ではイエスさまの胸の内を何も知らない熱狂的な人々の様子と、あたり一面に響く「ダビデの子にホサナ!」という声が、人間の持つ罪への無自覚さをあぶり出していると感じさせられます。

聖書は起こった情景を中心に語り、感情を語ることは多くありません。しかし、行間を想像しながら読むと非常に興味をそそられます。エルサレム入城の場面では四福音書の記述に違いがあります。マタイによる福音書だけが子ろばと一緒にいたろば(母ろばでしょうか)の二匹を連れてきました。知らない道、嗅いだことのない匂い、大勢の叫び声が飛び交う

ところに連れてこられた子ろばは不安に怯えていたかもしれません。そして、子ろばの初任務はイエスさまをお乗せすることでした。子ろばにとつて一緒にいたもう一頭のろばの存在がどれほど心強かったことでしょうか。マタイ福音書記者だけはいエスさまの子ろばに對するやさしい眼差しをしっかりと捉えていたので

十字架に向かわれるイエスさまは決して私たちに怒りを発したり、十字架を責めたりはなさいません。

むしろ優しい眼差しで右も左も分からない私たちを包んでくださっています。そして、子ろばにもう一頭のろばを新しい任務に遣わされるときは、それが試練としか思えないようなものであればなおのこと、必ず助け手を共に送ってくださいるお方です。主

のご用を果たすということはイエスさまにとつて重要なことなのです。それほどまでに私たちに期待を寄せ下されるイエスさまに、私も愛をもつて応えたい、どこまでもお仕えしたいと願っています。そして来る復活の朝、教会に集う方々と喜びあいたいと心から待ち望んでいます。

つのぶえ



「つのぶえ」と出会って、とても気に入っているところがあります。それは、「つのぶえ」のマークです。とてもシンプルだけど、味わい深いタッチで描かれたこの小さなマークに心惹かれていきます。シールや、葉のデザインにしたら良さげだろうなあ。とかイメージが膨らみます。

どうして「つのぶえ」なのかな?と色々想像していました。やはり聖書に係っているかな?と聖書に出てくる「つのぶえ」を探してみました。たくさんありました。中でも、礼拝で共によく読まれる、詩編に出てくる「角笛」がとても印象的でした。

旧約聖書*詩編九八編四〜六節

「全地よ、主に向かつて喜びの叫びをあげよ。歓声をあげ、喜び歌い、ほめ歌え。琴に合わせてほめ歌え。琴に合わせ、楽の音に合わせて。ラッパを吹き、角笛を響かせて。王なる主の御前に喜びの叫びをあげよ。」

さあ! 次回はどんな響きがかきこえてくるか楽しみですね!

(ティーポット)